

消 息

レオニード ヨッフエ先生を偲んで

レオニード ヨッフエ先生は、本年 3 月 17 日に急逝されました。商学部教職員を代表して先生のご逝去を悼み、謹んでお別れのご挨拶申し上げます。

先生が急逝されたという知らせを受けたのは、新型コロナ・ウイルス感染が拡大し、学期末と学期初めの対応に慌ただしい時期でした。大学に到校し事務所に立ち寄った際に訃報に接したのですが、一瞬事情が呑み込めない感じでした。というのも、春季休業期間中で授業はありませんでしたが、次年度の教員人事、英語カリキュラムの件などに関して、つい数日前まで普段どおり先生とメールのやり取りをしていたので、ご逝去という現実感がまったく湧きませんでした。

先生は、1985 年にカナダのマギル大学人文学部を卒業後、同大学大学院修士課程に進学され、その後カナダのカールトン大学大学院修士課程歴史学専攻に編入され同課程を 1988 年に修了されました。修士課程修了後は長野県の英語指導助手、新島学園女子短期大学専任教師をお務めになり、その間米国モントレイ・インスティテュート TEFL 専攻を 1995 年に修了され、同年から群馬大学外国人教師、2001 年からカナダ大使館書記官を経て 2006 年に本学部専任講師に着任され、2012 年に准教授に昇任されました。

先生は、履歴書にご自分の専門領域を外国語教育・言語政策・英語ライティングと書かれていますが、論文を拝読すると、先生の研究の視野は、歴史的、社会的な広がりを持っています。これは、先生の学部時代の専攻がスラブ研究、修士課程の専攻が歴史学であったことからすれば、当然のことかもしれません。とくに 2013 年に『文化論集』に掲載された論文“The leader in both directions: Retracting the history of immigration and integration policies in the Netherlands”は、先生のそうした研究姿勢がよく現れています。

同論文では、オランダにおける 19 世紀以降の移民政策の変遷と現況について論じら

れています。同国の移民政策は従来、多文化主義（multiculturalism）を特徴としてきましたが、ここでいう多文化主義とは、多様な文化的背景を持つ諸集団の併存を許容することを意味します。ただし、ヨッフエ先生の論文によれば、オランダは、欧州諸国中、他文化・民族に対して最も寛容な社会であったのが、2000年代初頭から移民に対する文化的同化政策に方向転換したということです。

欧州への移民・難民の流入は欧州市民との軋轢を生み、さらに欧州各国において排外的社会風潮が顕著になっていることは周知のとおりです。こうした欧州情勢に関する報道は近年国内では減少しており、とくにオランダの動向に関する報道は極めて少ないのが現状です。しかし先生の論文によれば、欧州において、移民に対する寛容な多文化主義の展開においても移民に対する同化政策の展開においても、オランダは欧州の先駆者であったということです。こうした点は、今後の欧州ひいては世界情勢を見通す際に、貴重な視点を提供しているといえます。

商学部では、2020年度入学者から Global Management Program への参加が可能となりましたが、このプログラム実施に当たっては、英語カリキュラム充実が不可欠です。そのため、英語の世話人であったヨッフエ先生には、英語のカリキュラム改革の先頭に立って頂いておりました。そうした改革の途上で亡くなられたことは、残念というしかありません。

ヨッフエ先生が本学に着任された年、クラブ・サークルの新生勧誘のピラを熱心に集めていたと聞いたことがあります。これは先生の学生に対する親近感・愛情の現われだと思えます。そうした学生思いの先生がいなくなられたのは返す返すも残念ですが、今後の早稲田大学そして商学部の発展を高いところから見守って頂きたいと思えます。改めて商学部教職員一同、先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

2020年8月

早稲田大学商学部長
早稲田商学同攻会長
藤田 誠